

瀧口修造とタケミヤ画廊

——第26回オマージュ瀧口修造展

佐谷和彦

佐谷画廊恒例のオマージュ瀧口修造展の今回のテーマは、瀧口修造の企画でタケミヤ画廊の協力により若い新人を中心にはじめ個展・グループ展を行なった、空前の展覧会についてである。

瀧口修造・自筆年譜〔「本の手帖」一九六九年八月、昭森社〕によると、瀧口は一九五一（昭和二〇）年、四八歳の頃に次のように記している。

……六月一日から神田駿河台の画材店竹見屋に「タケミヤ画廊」開設、若い新人に無償で会場を提供することになり、人選交渉一切を依頼されたので、私も無償を条件として引受けた。昭和三二年二月まで足かけ六年間に二〇一回の個展（稀れにグループ展を含む）を催し、多くの未知の作家に出会う。（その記録は「美術手帖」一九六四年八月号　藤松博「タケミヤ画廊と瀧口修造」に詳しい）……

その後、中島理壽氏の詳細な調査により、一九五一（昭和二六）年六月一日から一九五七（昭和三二）年四月まで二〇八回、うち個展（一人展を含む）一六三回、グループ展四五回であることが明らかになった。

一九五一年といえば敗戦後六年である。戦争の傷もようやく癒える状況になりつつあり、若い画家たちにも新しい世界を生きてゆこうとする動きがみえてきた。一九四九年に第一回読売アンデパンダン展が開催され、さらに一年後、瀧口修造によるタケミヤ画廊が登場する。

従来、ほんの一部の人間にしか評価されていなかつた瀧口修造のしごとが、去る一月から世田谷美術館で開催された展覧会「瀧口修造 夢の漂流物」で高い評価を得た。半世紀を経てようやく瀧口修造の真価が見えてきたのである。「オマージュ瀧口修造展」を今まで二六回、毎年開催してきた私としては感慨無量である。この年月、私を支えてくださつた多くの皆様に感謝の思いでいっぱいである。

今回のオマージュ瀧口修造展の展示概要是次のとおり。

瀧口修造作品 デカルコマニー二〇点のほか、バーントドローリング、水彩、ドローイングなど一〇点

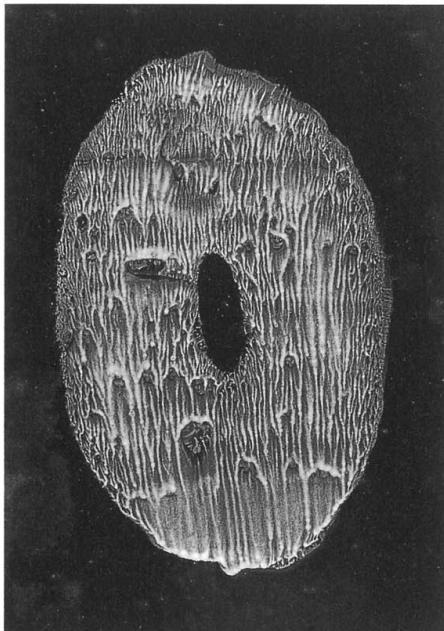
タケミヤ画廊展に出品された作品六〇一七〇点

タケミヤ画廊展の案内状三〇点

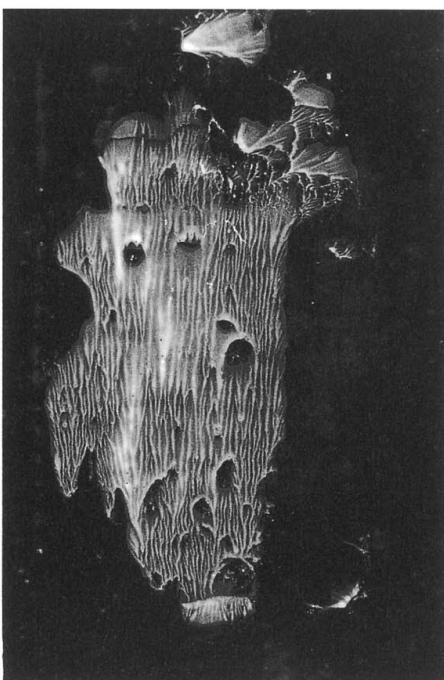
その他、当時の写真資料等

また、今回のカタログに寄稿していただいた執筆者の方々を簡単に紹介しておく。

巖谷國士（一九四三年） シュルレアリスム研究の第一人者。瀧口修造とは東京大学仏文科の学生の時（二〇歳）に出会い、以来特別の親交を結ぶ。今回の寄稿文には瀧口修造にとつてのタケミヤ画廊展について、余すところなく論じられて



瀧口修造 [デカルコマニー] 1972年頃 19.5×13.8cm



瀧口修造 [デカルコマニー] 1972年頃 20.3×13.7cm

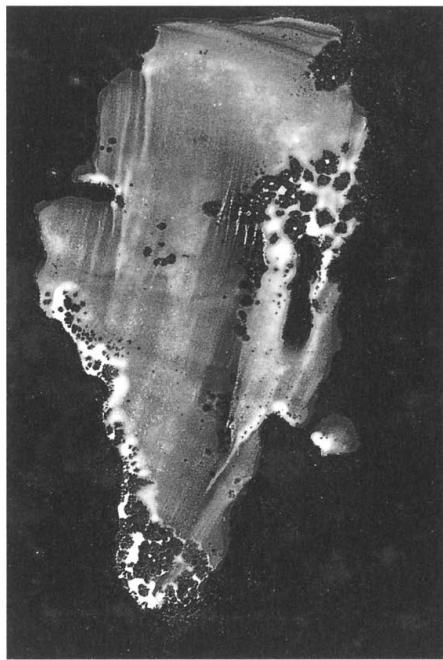
いる。近著に『封印された星』(一九〇四年、平凡社刊)がある。

鶴岡善久(一九三六年) 詩人、瀧口修造を含む文学研究。みすず書房『コレクション瀧口修造』全一四冊の監修者。現代美術、わけてもアンリ・ミショーに特に詳しい。

池田龍雄(一九二八年) 一九四八年に多摩美へ入学以来、現在に至るまで日本の現代美術界での生き字引的存在。タケミヤ画廊に出品した画家たち一五〇名余のうち多くの消息に通じている。第二回オマージュ瀧口展「池田龍雄 漂着」(一九〇一年七月)に、瀧口が一九四一年に特高に拘留された際の俳句「方寸の怒り見せたり小搖れ蓑虫」に寄せた作品を出品した。(今回のオマージュ展でも展示する。)

榎本和子(一九三〇年) 瀧口修造に発見され、タケミヤ画廊で個展を開催したことが榎本和子の出発点であるといえる。第一回オマージュ瀧口展「榎本和子 無限のヴィジョン・八面体——A・デューラー・メレンコリアI」は、その数的解析の見事さでファンボルト大学のベーメ博士をはじめ、学者たちの賞賛を浴びた。画期的な快挙である。

中島理壽(一九四四年) タケミヤ画廊のリスト作成にあたり、その展覧会の内容と回数を確定するため苦闘された。これはタケミヤ画廊の案内状や展覧会リーフレットが、画廊によつて作成されたのではなく作家各々が作成したため、多くの印刷物が散逸していることによる。最も多くの案内状をまとめて保存しておられたのは何と瀧口先生で、七〇点。



瀧口修造 [デカルコマニー] 1972年頃 18.8×12.7cm

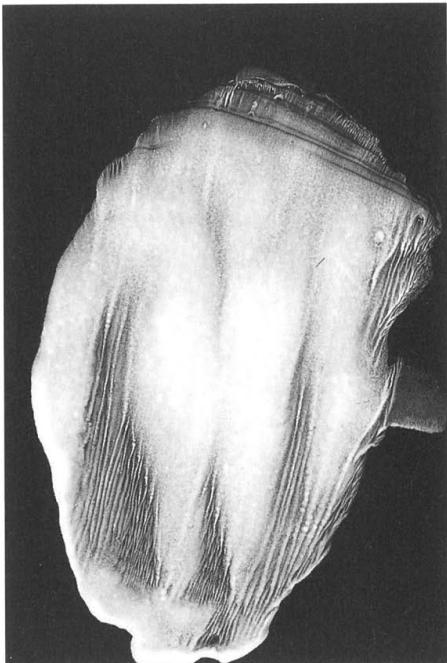
これはご遺族から慶應義塾大学アート・センターに寄贈されている。今回はそのうちの三〇点をお借りして展示する。地道にリストを作成された中島氏に敬意を表する。

以上、寄稿された五氏はそれぞれ瀧口修造と結ばれている。瀧口修造を敬愛する人物は一人一人が先生とあらかじめ示し合わせた秘密の周波で交信しているのだ。瀧口修造は今なお生きている。

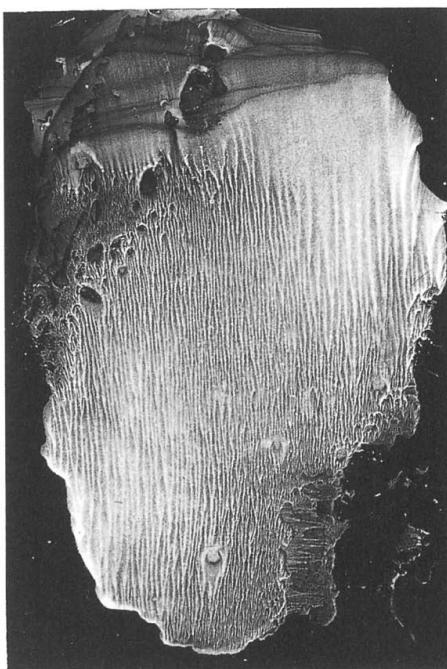
私はなぜ、最初のオマージュ瀧口修造展を開催することを決めたのか？

一九七九年に瀧口修造先生が亡くなつて、私を支える支柱は無くなつた。これから話を聞いてもらう人がいないのである。しかし私の背後には瀧口修造が常にいて、私のしごとをじいつと見ている。先生の目を感じる。私は筋の通つたしごとを継続するほかない。

そこでオマージュ瀧口修造展の構想が湧いてきたのである。まず第一にわが国の戦前、戦後を通して、グローバルに現代美術に発言し行動していた人物は瀧口修造しか存在しない。それに対する瀧口修造の評価がきわめて低いのはどう考へてもおかしい。画商である私としては、オマージュ瀧口修造展は理にかなつてゐる。先生ゆかりの作家を取り上げ、自分の力でできる範囲から始めよう。



瀧口修造 [デカルコマニー] 1972年頃 19.1×13.0cm

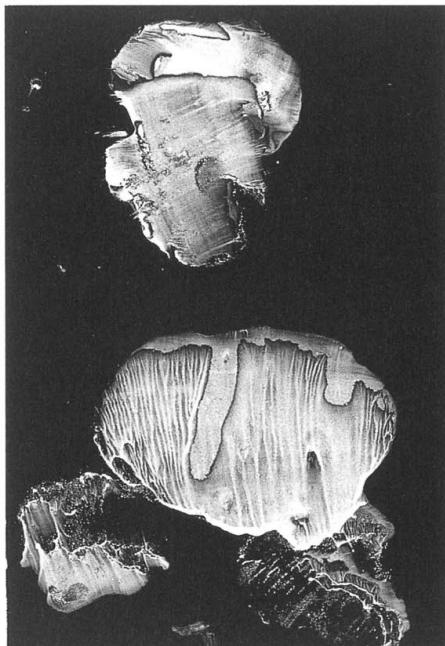


瀧口修造 [デカルコマニー] 1972年頃 19.3×13.0cm

具体的には、佐谷画廊を会場に、原則として毎年七月（先生の命日月）に開催すること。カタログは必ず作成し、そのテキストは当代のしかるべき評論家、作家、文学者などに依頼、若い人にも積極的に寄稿してもらつた。そしてあとがきは必ず自分で書く。

一九八一年七月、第一回オマージュ瀧口修造展開催。詩画集「物質のまなざし」（詩・瀧口修造、石版・アントニ・タピエス）を展示し、カタログテキストは田中清光さんに寄稿していただき。佐谷画廊のオマージュ瀧口修造展の出発である。以降、現在までのオマージュ展は次のとおり。

- 1 物質のまなざし（八一年） 2 妖精の距離（八二年） 3 加納光於（八三年） 4 山口勝弘（八四年） 5 瀧口修造（八五年） 6 荒川修作（八六年） 7 マルセル・デュシヤン（八七年） 8 赤瀬川原平（八八年） 9 マン・レイ（八九年） 10 ジョアン・ミロ（九〇年）
- 11 実験工房（九一年） 12 福島秀子（九二年） 13 アンドレ・ブルトン（九三年） 14 北代省三（九四年） 15 松澤宥（九五年） 16 七つの詩（九六年） 17 駒井哲郎（九七年） 18 榎本和子（九八年） 19 阿部展也（九九年） 20 中川幸夫（〇〇年、会場は資生堂ザ・ギンザアートスペース） 21 池田龍雄（〇一年、会場はスパンアートギャラリー） 22 田中清光（〇二年九月、会場はギャラリー池田美術） 23 池田満寿夫（〇二年一月、会場はオペラシティ・トップルーム寺田） 24 西脇順三郎（〇三年一月、会場はトップルーム寺田） 25 風倉匠（〇四年五月） 26 瀧口修造とタケミヤ画廊（〇五年、会場はお茶の水画廊） 1、2の会場は佐谷画廊（京橋）、3～19は佐谷画廊（銀座）、25は佐谷画廊（荻



瀧口修造 [デカルコマニー] 1972年頃 19.2×13.1cm

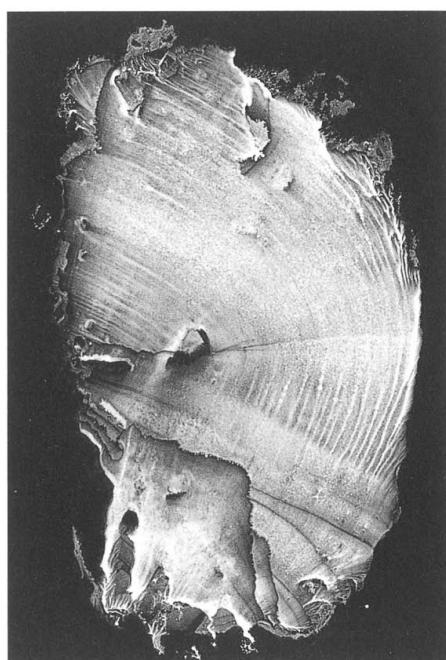
達)である。

今後のオマージュ瀧口修造展については、私の力のある限り、体調を整え、やれるだけやってゆこうと考えている。私のノートにオマージュ展については二〇件を超える案件がある。と同時に、オマージュ展とは別にオドロキの作家が現われるのを期待している。いかにボケないように体を鍛えるか、これが問題である。

二〇〇五年七月



瀧口修造 [デカルコマニー] 1972年頃 19.2×13.1cm



瀧口修造 [デカルコマニー] 1972年頃 19.2×13.1cm